

刹那に

あ、つつい。

暑い。ただひたすらに暑い。全力で殺しに来てる。  
ミーンミンミンミンとかいうけどね、実際ミーンじやないわ  
よ。ジーンよジーン。あー、蝉うつさい。

夏休み中、遊びにおいて言うのはいいけどさ。留守にするなら言つといてよね。華の女子高生の姪が、せっかく友達との約束を蹴つて、京都にあるおばさんちに遊びに来たつてのに。

インターネットを押しても、玄関で呼んでみても、返事はない。  
携帯でも連絡とれないし。仕方ないから、スマートケースはドアの前に置いて、誰か帰つて来るまでうろうろすることにした。  
財布と携帯は持つてきたし、盗られて困るもんはない。

にしても。

「ひいじいちゃんの弓を譲つてくれるって言うから、来てあげたのに……ほんと最悪」

あたしは弓道部に所属している。夏休みにも部活の予定は入つてた。でも、部活の貸し出し用じやなくて、自分専用の弓矢が持てるつて誘惑には抗えず。

まあ、その人によつてピッタリな弓つて違うらしいから、ひいじいちゃんの弓矢はあたしに合わないかもしれないけど……

そのときはそのとき、つてこと。

「どつか、涼しいと、ないかな」

下手に遠くに行つて帰れなくなつても困るし、当てもなく歩いてく。観光で来るなら、古都の街並みつてのもなかなか魅力的なんだろうけど、今あたしが欲してるのはそれじやない。

午前十一時半。クーラーの利いたファストフード店はどこもかしこも人口密度がハンパない。それに加えて、京都の怖いところつて、普通にあるお店屋さんの値段が普通じやないところ。行くとこ、マジで皆無。

……そんな、わけで。

誰でも立ち寄れて、しかも何も買わなくてよくて、京都にはいっぱいある場所——そう、神社にあたしがふらふら入つて行ったのは、必然といえば必然だつた。

「うつわ、天国」

思った通り、森に引つ付くよにして建つ神社の敷地内は涼しかつた。名前はわからんけど、なかなか有名な神社らしい。人がいっぱい鳥居をくぐつていく。あたしも脇に灯笼の並ぶ石段を上つて、鳥居の前に立つと、神社の中を覗き込んだ。

鳥居の先は背の高い杉林。白い石畳の道がすうつと伸びてる。ところどころ道が分かれて、祠とかやたらでつかい木とかに通じてるみたい。真つ直ぐ行くと、森へ行く道。朱塗りの小さな

橋を渡ることになる。

「……あれ？」

橋の上に、知り合いの姿が見えたような気がして、あたしは目を細めた。

長い黒髪を腰のあたりで束ねた男の人。男の人だと思ったのは、Tシャツから覗く腕が、遠くから見てもわかるほどガツチリしていたから。

長いものを入れた布袋と、細い円柱の筒を背負っている。あれ、多分弓矢だ。

まさか。  
「眼さん……？」

その人は橋を渡り終え、あつという間に森の中へ入って行ってしまう。あたしは慌てて石畳の道を走り出した。

間違いない。あれは、眼さんだ。  
まさか、彼も京都に来ているだなんて！

眼さんっていうのは、あたしの弓のお師匠様。

高校から弓道を始めたはいいんだけど、超がつくほどヘッタクソだつたあたしは、お母さんの勧めで、開放されている近所の弓道場に通うことになった。その持ち主が上星眼さんで、あたしは週に一回、彼に弓道を教えてもらっている。

今年でちょうど八十歳になるらしいけど、全然そつは見えな

い。背筋はしつかり伸びてし、白髪も数えるほどしかない。  
まあ、若く見えるのは、童顔なせいもあるだろうけど。

基本、無駄話はしない。しかもニコリともしない、厳しいおじいさん。でも、ド下手なあたしに、弓道のなんたるかを教えてくれたの。

眼さんのおかげで、あたしは色んな面で成長できた。

まさに、人生のお師匠様なんだ。

朱塗りの橋までは、ざつと五百メートルはある。あたしが橋に足をかけたときには、眼さんの姿はどこにもなかつた。

だけど、そこで諦める気にはなれなかつた。あたしは橋を渡り、森の中に入った――……。

「いッ……」

ギン、と頭の奥に鋭い痛みが走り、あたしは思わず足を止める。

「……氣のせい、かな」

痛みは一瞬だけだつた。なのに、熱中症？　いや、それだつたらこんなもんじやないはず。あたしは一、二回軽く頭を振つてから、何ともないのを確認して、再び眼さんを追つて走り出した。

『え、上星さんが？』

あたしが眼さんから弓道を教わると聞いて、お父さんは驚いたようだった。

『たつていう話は聞いたことがないな』

りお弟子さんの一人や一人、いると思つてたんだけどねえ』

『これにお申せんの三葉

ないんだそうだ』

『……由貴に素質があるとでも思つたのかしら？』

「 素質なんて ない 現にあたしは、弓道を初めて 一年以上経つた今も、的に矢があたらないことの方が多い。選手にも選ばれないし、未だにヘッタクソ。それでも、眼さんはあたしに教えてくれている。一度も怒ることなく、繰り返し、繰り返し。

「眼さんつ」

森の中に反響する、あたしの叫び。なぜか橋を渡った後は、全く人に会わない。それにものすごく静かで、あんなにうるさかった蝉の声すらも、今は懐かしく感じる。

道のつくりも、橋の前まで石畳だったのが、森へ入ると砂利

になつていた。ぐにやぐにやと曲がりくねつていて、先に何が

トドメに、段々と暗くなってきた気がする。確かに森の中つ

く、ない？ 眼さんからの返事もないし、もしかしたら。

鳥几が立つて、お椀をすます

鳥肌が立ってきた腕をさする。ここに入っちゃいけないトコ  
なのかもしれない。場所が場所なだけに、さすがに気味悪くな  
つてきた。

帰ろ……

ぐるりと辺りを見回した後に、あたしはぐにやぐにやの道を  
引き返した。そして、またしばらく歩く。

歩く。曲がる。歩く。曲がる。歩く。歩く。曲がる。もいつ  
ちよ曲がる。歩く。歩く。曲がる。歩く。曲がる。歩く、歩く、  
歩く、曲がる、歩く、歩く歩く歩く……。

止まる

いくら歩いても、森の入り口にあつた橋にたどり着かない。  
あたし、そんなに奥までは行つてなかつたはず。

心臓が嫌な音を立てる。首筋を、冷たい汗が滑り落ちた。

いや、ありえない。絶対、そんなわけない。あたし、ちよつと迷つただけだ。

——一本道なのに？

人を必死に追いかけてきたんなら、そういうこともあるよ、  
多分。だって、だってそうでないと、これって。

携帯を取り出す。お約束なことに、闇外だった。ちょっと、  
しつかりしてよソフトバンク。

がああ。

低いカラスの声。あたしは振り向いて……そして、愕然とする。目の前に分かれ道ができていた。

一本は、細い石段の上り坂。もう一本は、闇への道。

どつちの道も、通ってきた覚えはない。今あたし、振り向いたはずなのに。

それに。

闇へ続く道の入り口に、四つん這いの黒い何かが、いる。  
ただ真っ黒。目らしき光もない。真っ黒に塗られた人が、四  
つん這いになつてゐる感じ。  
もう「まかしてられない。  
……」これは、ヤバい。

『弓矢は歴史のある武器だ。この数千年間、多くの命を狩りと

つてきた』

眼さんは最初、こんなことを話してくれた。

『無論、わたしたちは誰かに向けて弓を射るということはない。

礼儀と精神の修業のために、弓道を極めることとなる。ここで  
学んだことは必ずや、お前のこれから的人生の糧となるだろ？』  
ぴりぴりと張り詰めた空気。  
めまいがするほどの緊張感。  
容赦のない重圧。

『だがわたしは、お前に弓道をやれと強要するつもりはない。  
いい加減な気持ちでやるくらいなら来るな。本気で弓道がやり  
たいと、そう思つたときだけここに來い』

ナメてんじゃないわよ。こちとら、週一で怖いおじいさんの  
ところに通つてんの。そこで、何度も何度も緊張状態に身を置い  
てきてるの。泣き黒子ある人は涙もろいって言うけど、あたし  
は違うんだからねっ！

戻つても無限ループするだけで、分かれ道しか道がないって  
んなら……坂道、駆け上つてやろうじやない！

あたしは四つん這いのヤツと目（そんなもんないから、どつ  
ちかつていうと顔だけ）を合わせないようにしながら、坂道  
を駆け上り始めた。

がああ、がああ。

カラスの声が近くなる。恐怖で冷たくなる体に鞭打つて、あ  
たしは走り続ける。

があがあがあがあ。

さすがに、カラスに行く手を阻まれると立ち止まつた。目前にいるやつだけじやない、いつのまにかカラスが何十羽も集まつてきて、あたしのことをじつと見てる。

そして、一気に飛び立つ。……あたしの方に向かつて！

「——ひ、

ホントに怖いときつて、悲鳴が喉に張り付くらしい。声が、出ない。心の中じや絶叫中なの。

こんな風になるくらいなら、少しくらい暑さ我慢して、おばさんの家の前にいるんだつた。

目をつむることもできないまま、固まつていたとき。

びいん。

弦の音が、力強く響いた。

「大丈夫ですか！」

同時に男の人の声が降つてくる。二十くらい、かな。結構若い声。とりあえず、眼さんの声じやない。

びいん。また聞こえた。見上げると、坂の上に弓を持つた人が立つてゐる。彼が、弓の弦を指で弾いてるみたい。え、弓つて楽器にもなるの？

弦の音が響くたび、カラスたちが散らばつていく。あたしは

すっかり安心して、へたりこんでしまつた。男の人が近づいてくる。その姿を見て、あたしは思わず声をあげた。

「ま、眼さんっ？」

その人は、確かに若かつたんだけど……童顔の顔立ちといい、長い髪といい、眼さんそつくりだつた。というかあたしが追いかけてきたのつて、もしかしてこの人？

「え？」

男の人は驚いた顔で聞き返した後に、こう口にした。

「じいちゃんを、ご存じで？」

数分後。辺りはますます薄暗くなり、霧がかかつてきた。

あたしとその人は小さな祠の前にいた。坂道を登り終えた先にあつたものだ。男の人が「近くに湧き水が流れでますし、比較的安全っぽいので、ここで休憩しましよう」つて言うから、ベンチとかはないけど一休みすることにしたんだ。

「あの、先ほどは助けてくださいて、ありがとうございました」水で喉を潤すと、あたし、深々と頭を下げる。座れる場所を探してくれていた男の人は、それに気づくと首を振つた。

「いやいや、遅れてしまつてごめんなさい。もつとはやく気付くべきでした。まさか一般人が迷い込んでいたなんて」一般人。つてことは、この人は一般人じやない、と。

まあ、弓の弦を弾いてカラスを追い払うような人が、一般人

なわけないか。格好はテーラードジャケット（見たときはTシャツだったけど、寒くなつたから着たのかも）にジーンズつていう、どこにでもいそうなものなんだけどな。

「俺は上星瞬といいます。日本本部のメモリートです」

「あ、あたし、池川由紀です」

いけない、恩人に名乗らせてしまつた。あたしも自己紹介する。

「もしかして、眼さんのお孫さんですか？」

瞬さんはうなずいた。うん、それなら納得。そつか、メモリートのお孫さんがいるとは聞いていたけど、こんなに似ていらしたんだ。

上星家つてのが代々メモリートの家系なのは、うちの近所じや有名な話だ。だつて、すつごいお屋敷なんだもん。弓道場を持つてるつて時点で普通の家じやないけどさ。

メモリートの話は新聞なんかにもよく載つてるし、どういうものか知らない人もいるみたいだけど、あたしには身近な話。「あたし、眼さんに弓を教えてもらつてるんです。今日は親戚の家に遊びに来てたんですけど、えつと、散歩中に瞬さんを見かけて。眼さんだと思つて、追いかけちゃつたんです」

「ああ、なるほど」

冷静に考えてみると、あんな目に遭つたのも自業自得なわけで。だけど瞬さんは、申し訳なさそな顔をした。

「つてことは、俺が巻き込んだんですね」

「あ、いえ、そういうつもりじゃ……」

「責任もつて、絶対に元の空間に送り届けます」

「幼い顔つきになる。」

「元の空間ですか？」

「ええ、薄々気づいてらつしやるとは思いますが、ここは普通の空間ではありません。人間がいてはならない空間です」確かに気付いてはいたけど、なんでそんなとこ、迷い込んでやつたんだろう。

「ここに来る途中で、何か変な物を見ませんでしたか？」

「変なもの？」

「真っ黒な、四つん這いのヤツとか」

見た。バツチリ見た。思い出すだけで寒気が走る。

あたしがガクガクとうなづくと、瞬さんは眞面目な顔をして説明してくれた。

「アイツは、俺がここまで追い込んできたヤツなんです。ちょっと前までは町のど真ん中にいたんですよ。『記録』を見たところ、ここから来たモノらしいので、とりあえず追い返してみました。もしかしたら、そのまま帰つてくれるかもしれないのに途中、困つた様子で頭をかく。」

「でも、アレはここから迷い込んだんじやなくて、ここで生ま

れたものみたいで。その証拠に、生まれ故郷に帰つて来たことによつて力が強まつて、俺たちをここに閉じ込めるまでになつてしまつた」

「……ん、どゆこと？ あたしは首をかしげる。

「えーっとですね。最初俺は、ソイツがどつか別の世界から、この神社のどこかに開いた穴を通つて来ちやつたと思つてたんです。だから、神社まで誘導してきて、そのまま帰つてもらおうと思つた。ここまでは大丈夫ですか？」

「はい」

「でも、そうじやなかつたんです。ここに穴は開いてなくて、ただ単にソイツはここで生まれたものでした。生まれ故郷に戻つてくるとパワーアップするやつつているんですけど、ソイツがまさにそれで……『敵』認定してた俺を、自分の作つた空間に閉じ込めました。例を言うと、誰かが作つたテントの中に閉じ込められた感じです」

「あーっと。うん、ほんやーりとだけど、分かつた気がする。あたしがうなづくと、瞬さんも『よかつた』と言つてニコッとした」

「とりあえず、アレを倒せば元の世界には戻れます。俺が『記録』を見て探してきますから、池川さんはここにいてください」

「え」

「血の気が一気に引く。何、あたし、また一人になるつてこと？」

ホラーゲームの主人公じやあるまいし、余計な死亡フラグは立てたくないんだけど

瞬さんは慌てて言つた。

「大丈夫です、一人にするわけじやありません。ちゃんと、俺の分身を置いていきます」

「……へ？」

ジーンズのポケットから、ケースに入れられた小さなハサミを取り出す瞬さん。そして何をするかと思えば、長い髪の毛を一本切り取つて、ぎゅっと握りしめる。額に当てて強く念じてから、ふつと息を吹きかけた。

手から落としていく、髪の毛。

地面に落ちる、と思つたとき、そこには髪の毛はなく、一人の青年が立つていた。

「上星家の能力は【髪分身】です。俺もじいちゃんも、別にお洒落で髪を伸ばしてゐわけじやないんですよ。分身の依り代とするためなんです」

瞬さんは苦笑する。見ると、髪の毛でできた（？）青年は、姿かたちがまんま瞬さんだつた。違う点といえど、色素が全体的に薄い」とくらい。目は赤茶色で、髪はダークグレー。肌も白に近い。本人と並べても、ちゃんと見分けがつく。

「分身一人じや心もとなく思われるかもしませんが、すでにこの森じゅうに分身を散らしていますし、『記録』を見るときは

俺が無防備になるので、どうしても分身を見張りに立たせなきやいけません。あまり出しすぎると体力を消耗するんです。すみませんが、我慢してください」

我慢もなにも、十分すぎます。

分身の瞬さんも、真っ白な弓と矢筒を持つていて。長さも形状も、瞬さん本人が手にしているものと全く同じ。

これなら大丈夫でしょ。うなずいてみせると、瞬さんはジャケットを脱いで、あたしにかけてくれながら言つた。

「護衛用に作った分身です。全力で池川さんを守ってくれますし、何かあつたらすぐ俺に連絡してくれますよ」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、行つてきます」

瞬さんが弓を持ち、矢筒を背負つて、霧の中に飛び出していく。あたしは分身の顔を見た。本人に比べてかなり無表情な分身は、強い光を帯びた目でこつちを見ていた。

『どうしてあたしを、弟子にしてくださつたんですか』

一度、眼さんに聞いてみたことがある。

答えてくれないだろうなあと思いながら、それでも一応聞いてみただけど、眼さんの答えはこれだつた。

『……わたしには、ちょうどお前くらいの年のときにメモリー

トになつた孫がいる。今ではもう成人しているが、当時の孫に

はまだ教えてやりたいことがたくさんあつた』

あたしの方を見る。その目は、とても優しかつた。

『孫に教えられなかつたぶんを、わたしはお前に教えているのかもしれない。お前のよう、血が出るまで唇を噛みしめ、泣きながらでもわたしの教えに従う子供だつた』

それつきり、お孫さんの話が眼さんの口から出てくることはなかつたから、忘れていたのだけど。

これなら自慢のお孫さんですね、眼さん。

霧も晴れてきて、夜の森の中。相変わらず、重い静けさが漂つていて。あたしは地面に体育座りをして、分身は変わらず立つていて。ま、ほつときましよ。

『心配しててかな、おばさん』

現実世界でも夜になつてたら、あたしは失踪したことになつてるだろう。それだと瞬さんが誘拐犯つてことになつちやうんだろうか。

『でも、メモリートだしね。大丈夫か』

ね、と分身に話しかける。分身は喋れないみたいだけど、あたしが話しかけると、ニコニコと笑つてくれた。

『……！』

刹那に。

その笑顔が厳しい顔つきに変わる。何かあつたんだ。あたし

も立ち上がる。

どんづ。

分身があたしを押した。よろけて、再びお尻が地べたに戻つてくるあたし。

目の前に現れる黒い影。近くで見ても、やつぱり口とか目がない。ただ、サイズを見てみると意外と小さかった。分身が後ろから羽交い絞めにし、取つ組み合う黒と白の二人。矢筒が転がり、矢が散らばる。

分身と目が合つた。逃げる、と瞬さんの声が頭で弾ける。

咄嗟にあたし、分身が落とした弓矢を拾つて、駆けだした。

うおお、とくぐもつた声が聞こえる。少し走つた後振り向く。分身が黒いヤツの上に馬乗りになつていて。けれど、すぐにひっくり返される。黒いヤツの顔が、ぎざぎざの形に半分に割れた。もしかして、口？

そのまま分身の喉笛に噛みつく。血を想像したけど、悲鳴も鮮血も飛び散らない。きっと分身だから、痛みを感じたりはないんだ。分身が手を伸ばし、また取つ組み合う。

分身の顔が見えた。ひどく、苦しそうな顔。必死の形相。さつきまで浮かべていた笑顔がよぎる。

気付くとあたしは、こんなことを考えていた。

もつと一人から離れなきや。ここから撃つても、威力は大したことがない。

そう、あたしは……逃げるという選択肢よりも、戦うという選択肢を選んでいた。彼らの大きさがいつも練習で使つてゐる的くらになるまで離れると、弓を構える。

普段使つてる弓の重さやサイズじやないから、やりにくい。ただでさえあたらないあたしの弓矢。不安要素しかない。でも。

「……やら、なきや」

ゆづくりと、弓を引く。散らばつてしまつた矢は一本しか拾つて来れなかつた。どうせ一回矢を放つてしまえば、黒いヤツはあたしの方にまつしぐらだらうし……同じよ、同じ。

足が震える。唇を強く噛み始めた。

思い出せ。眼さんの教えを。  
眼さんも、いつも一本しか矢をくれないじやないか。それを撃つた後は、しばらく一本目はもらえない。

『全ての矢を射尽くすことを、射切る、と言つ』

あたしの矢はいつだつて一本。だから、あたしが矢を放したとき、そのとき持つてゐる全ての矢は射尽くされて……あたしは射切る、ことになる。

『撃とう、と思ったときの矢に力はない。撃とうと思うな。矢とはいつの間にか放たれている。その瞬間を、わたしたちは感じじることができない』

分身の動きが鈍くなり始める。黒いヤツが咆哮した。  
あたしはもう弓を引ききつている。いつでも、放てる。

涙が滲む。眼さん、あたし、あなたに教えてもらえて本当に  
よかつた。

「……あれ？」

『そして狙うのは的ではない。的と一体化し、自分自身を狙え。  
己の脈打つ心臓を、その矢で狙うのだ』

意味が分からなかつた、言葉。今でも完全にわかつてゐるとは  
言えない。

だけど今、ちょっとわかつたような気がする。

ねえ、眼さん。

あたし、こんなに落ち着いて弓を引いてるの、初めてです。

ま、ね。  
確かにあたりはしたんだけどさ。ようく考えてみると、肩つ  
て別に急所じやないのよ。  
喜びから我に返つたときには、黒いヤツはこちらに猛ダッシュ  
してきた。  
「ちよ、ちょっととお！」  
空氣読めよ！ 倒れろよそこは！  
そんなことはお構いなし。異様に細長い指が、あたしの鼻に  
触れる。口がパカリと開いた。

『——刹那に射切よ、由貴』

刹那に。

黒いヤツは、数十メートル横に飛んだ。

頭をしつかりと、光る矢が突き刺して。

飛んできた方を見ると、勿論そこには木々の隙間に、同じよ

うに光る弓を構えた姿のままの瞬さんがいた。

矢を放つ感覺はなかつた。気付けば一本の矢が、黒いヤツの  
肩に食い込んでいた。ぐらり、と傾く黒い体。

や……つた。あたつた。あたつたんだ、あたし。

涙が滲む。眼さん、あたし、あなたに教えてもらえて本当に

よかつた。

「……あれ？」

「…………」

「あんな遠くから撃つたの？ 瞬さんは、視力一・〇のあたしからですら顔が見えないほど遠くにいた。親指の爪くらいのサイズしかない。あそこから、的確に頭を撃つたってこと……？」

ぶるり、と体が震える。

彼は本当に、眼さんの孫で。

そして特殊捜査戦闘部隊、メモリートの一員なのだ。

「分身から危険信号が届いて、すぐ池川さんたちの所に戻つて来れたのはよかつたものの——池川さんが矢を撃つたときは、ホントどうしようかと思いましたよ。あのまま逃げてくれるのが一番安全だったのに」

うつ。確かにあれは調子に乗つてました……。というか瞬さん、あんな遠くからよく見えてるね。視力超いいじやん。

「でも、じいちゃんからちゃんと教えてもらつてるんだなっていうのはよくわかりましたよ。弓矢のことだけじやなくて、負けん気とかもね」「

橋を渡りながら、笑う瞬さん。

「今だからこそ言いますが、最初池川さん、カラスに襲われたでしょう？ あれ、俺が『鳴弦』<sup>めいげん</sup>っていう、弓の弦を弾いて邪氣を祓う技で追い払つたのは、実はカラスじやないんですよ」「え？」

「あのとき、池川さんの後ろに、ほぼぴつたりあの黒いのが張り付いていたんです。あのカラスたちは、それを追い払おうとしてくれてたんですよ。神様の使いとかだったのかな」

「これからはカラスの残飯あさりを、温かい目で見られるようになるうと思う。

瞬さんと一緒に道を戻つてみると、やっぱり分かれ道なんてなくつて。普通に、最初に渡つてきた橋のところまでたどり着くことができた。

「そういえば」

鳥居まで来ると、あたしは聞いてみた。

「瞬さんの任務って、アイツを倒すことだったんですか？」

「いいえ、俺の任務はこの地域の調査です。この後、俺より高位のメモリートが来ます。……でも見た限り、これは普通のメモリートの手に負えるモノじゃないですね。アイツもただの分裂した一部でしかないです」

「調査？ 元から『こらへん』色々起つてるってこと？」

「大丈夫ですよ。そういうヤツらのために、俺たちがいるんでですから。今回のことはしつかり報告しますし、これからも詳しく調査して、速やかに対処します。……とりあえず、分裂したうちの一人とはいえ、一部を倒したわけですから、『こらへん』はしばらく安心ですし」

「そ、それならいいんだけども。」

階段を下り、神社から離れていくと、途端に暑さが戻つてくる。額の汗をぬぐいながら、瞬さんは言つた。

「『こら』でお別れです。俺はこれから違う場所へ向かいますので」

「えつ、休みなしですか？」

「これくらいのことは日常茶飯事ですからね。池川さんは疲れただでしょ？ から、どうぞゆっくり休んでください」

では、とあたしとは正反対の道を行こうとして、瞬さんは立ち止まる。いたずらっ子のような笑顔で戻つてきて、あたしを手招いた。

手をメガホンの形にするものだから、耳を近づけてみる。

「……これ、多分オフレコなんんですけど」

「は、はい」

「じいちゃんが、池川さんを弟子にした理由」

えつ、聞きたい聞きたい。

瞬さんは『元の姿勢に戻つて、自分の目元を指差した。

「池川さん、『こら』に泣き黒子あるでしょ？」

「え、あ、はい！」

「しかも、池川『ユキ』さんて、おっしゃるでしょ？」

「その通りです。」

「俺のばあちゃん、ユキっていうんです。スノウの雪、ですか。しかも、泣き黒子があつたんですね。俺が生まれる前に亡くなつたってんで、会つたことないんですが、写真を見たことがあって」

瞬さんの、おばあさん。

つまり、眼さんの奥さん。

「そこまで一致してたら、そりやあじいちゃんも邪魔にできませんよ。……だから、どうかこれからも弓道場に通つてあげてくださいね」

瞬さんの笑顔は、とても優しいものだった。

「じゃ、改めて」

『由貴』と『雪』

同じ位置の泣き黒子。

そつと、目元に指を当ててみる。

瞬さんが手を振る。あたしもおじぎを返した。

「それでは、またどこかで会えたなら」

「ええ、またどこかで、きっと！」

人の縁というのは、不思議なものみたいだしね！